

鏡が割れた日

世界の戦火は止まるどころかさらに熾烈さを増していた。学業半ばの弟は国のお役にたちたいと戦地に赴いた。

その日から「君、死にたもうことなかれ・・・」

詩人、与謝野晶子の詩が頭の中で走馬燈のように廻りだした。

ある日のこと、箱にはめられた鏡が突然割れた。

しばらく後の六月十六日、弟の戦死の知らせが入った。体の力が抜け言葉を失っていた日々の中で淡い光を放ちゆくり川面を流れる精霊流しをぼんやりながめていたらどこからともなく一羽の白い鳥が飛んできてすぐそばにありたった。

「姉さん・・・鳥が呼んだ。そして三月十九日と告げると白い鳥は闇にきえた。・・・夢だった。

三月十九日は、まさに鏡が割れたその日だった・・・合掌

八月十五日、終戦

弟は突攻隊だった。



協力

大明神区長 棚橋 清隆さん (65歳)
協力者 三谷さだ子さん (享年92歳)

あの頃の『広報あんぱち』

〜平成5年2月号の記事より〜



安八町北今ヶ淵 在住
空尾 幸三 さん

卓球をとおして
生涯の仲間づくりを

当時は、転勤で安八町に来て、やっと20年が経過した頃でした。仕事が終わると、毎日同僚たちと卓球の練習に励み、その甲斐あつて

技術面が飛躍的に向上し、町大会や郡大会等、いろいろな大会に参加していました。また、練習や大会をとおして多くの人たちとの交流もありました。そのおかげで、地域スポーツの振興状況や町の文化や風習などが徐々に分かりはじめ、現在に至っています。

現在は、週2回、卓球クラブの練習に参加しており、特にダブルスの練習に力を入れています。

私にとって卓球は生活のなかで欠かせることができない趣味です。今後毎日健康に過ごせるように、身体が動く限り卓球を続けていくつもりです。



▲岐阜新聞杯新春卓球大会
～16部門で熱戦が繰り上げられる～(まちのトピックスより)